様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月 １７ 日現在

機関番号：３２６７１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2019～2022
課題番号：１９Ｋ０２９３７

研究課題名（和文）知的障害児・者における自然体験プログラムの開発

研究課題名（英文）Development of nature-oriented experience programs for the students with intellectual disabilities

研究代表者
中丸　信吾（Nakamaru, Shingo）

日本女子体育大学・体育学部・講師

研究者番号：７０４２４２３１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、知的障害特別支援学校における自然体験活動の実態について調査し、学校の状況や生徒に実態に応じて様々な形で教育課程に位置付けて実施していることが明らかになった。一方、障害種別によって肢体不自由や病弱者では実施率が低いことも明らかになった。
また、学校内で実施する自然体験プログラムの開発および有用性についても検証し、自然体験プログラムを特別支援学校の教育課程（生活単元学習）として取り扱い、自然体験プログラムが安全かつ効果的に実施できることを明らかにし、知的障害のある生徒における自然体験活動の学びのプロセスについても明らかにすることができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
青少年の健全育成に自然体験活動は重要な役割を持っている。このことは知的障害児・者においても例外ではないはずだが、特別支援学校においては様々な障壁があり自然体験活動の場を確保することは難しい現状と言わざるを得ない。また、知的障害児・者においては系統立てた学習内容を計画することが必要であるため学校内で継続的に実施できる自然体験プログラムの開発が急務である。本研究の成果は、特別支援学校において自然体験活動を実施するための基礎資料となり、自然体験活動を実施することが難しいとされる知的障害児・者に自然体験の場を提供するための一助になるに違いない。

研究成果の概要（英文）：This study investigated the actual status of nature experience programs in special needs schools.
The results revealed that the programs are implemented in various ways and positioned in the curriculum according to the school situation and the actual conditions of the students. On the other hand, it was also revealed that the implementation rate of nature experience programs was low for the physically disabled and health impairments.
In addition, this study developed an in-school nature experience program for special needs schools and verified its usefulness. The study found that the nature experience programs can be safely and effectively implemented as part of the curriculum at special needs schools. We were also able to clarify the learning process of nature experience programs for students with intellectual disabilities.

研究分野：野外教育

キーワード：自然体験活動　知的障害　特別支援学校　カリキュラム

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

青少年の健全育成に自然体験活動は重要な役割を持っている。文部科学省（2008）によると、体験活動の意義について、豊かな人間性、自ら学び、自ら考える力などの生きる力の基盤、子どもの成長の糧としての役割が期待されるとしている。また、近年の青少年をめぐる諸問題、つまり人間関係をうまく作れない、規範意識の低下、物事に創意をもって取り組む意欲の欠如などの解決の糸口のひとつとして自然体験活動の重要性は高まっている。平成29 年 3 月に改訂された小学校および中学校学習指導要領（文部科学省,2017）においても体験活動の充実が明記されており、道徳では、自然体験活動などの豊かな体験を通して児童の内面に根ざした道徳性の育成が図られるよう配慮しなければならないとしている。このことは、特別支援学校においても例外ではなく特別支援学校学習指導要領（文部科学省,2017）において自然体験活動を含めた体験活動の充実が明記されている。しかしながら、障害児・者にとっては外出の機会、出会いの場、あるいは余暇、レクリエーションの場が少なく、自然体験活動を実施する機会が少ないことが指摘されている（多田,2012）。

これまでに、青少年における自然体験活動の実態については幼稚園・保育所を対象とした報告（井上，2007）や小中学生を対象とした報告（国立青少年教育振興機構,2016）など数多く行われている。ところが、障害児・者を対象とした自然体験活動の実態については、筑波大学附属学校群や東京学芸大学附属特別支援学校などで自然教室等の自然体験活動が実施されているが活動の詳細などは明らかになっておらず、特別支援学校学習指導要領において体験活動の充実が明記されているにも関わらず、全国の特別支援学校における自然体験活動の実態は明らかになっていない。

障害児・者の自然体験活動について、特に知的障害児・者を対象とする場合には、障害の程度や特徴を捉えた上で実施する必要がある。知的障害児・者はコミュニケーションがうまくとれない、学習に時間がかかる、適応力が弱い、自律性が弱いなどの特徴（金山,2012）がある。したがって、知的障害児・者において自然体験活動を実施する際には、系統立てた学習内容を計画することが必要である。単発での学校外での宿泊を伴った自然体験活動だけでなく、継続的に実施できる学校内で自然体験活動を実施することが望まれるが、その内容については不明であり、学校内で実施する自然体験プログラムの開発が急務である。

２．研究の目的

本研究では、知的障害児・者の自然体験活動に着目し、知的障害特別支援学校における自然体験活動の実態を明らかにし、学校内で実施する自然体験プログラムの開発および実践による有用性の検証を目的とした。

３．研究の方法

（１）知的障害特別支援学校における自然体験活動の実態

全国の中学校 188 校、高等学校 192 校の特別支援学校を対象に、2019 年度の特別支援学校の教育課程における自然体験活動の実施状況について調査した。調査項目は、フェイス項目（学校の生徒数、クラス数、教員数、主な障害の種別）、自然体験活動の実施の有無、教育課程上の位置付け、実施している場合の実施状況（宿泊の有無、活動内容）、実施していない場合の学校の状況（実施しない理由、今後の実施の意思と予定）とした。得られたデータのうち、量的データは統計解析を行い、質的データは計量テキスト分析を行った。

（２）知的障害特別支援学校の校内で実施する自然体験プログラムの開発および有用性の検証

自然体験プログラムを特別支援学校の教育課程（生活単元学習）として取り扱い、知的障害児・者が実施する場合でも安全性が確保でき、教育効果の期待できるプログラムの効果について検証を行った。

自然体験プログラムは、知的障害特別支援学校中学部 2 年生において、教育課程の中で生活単元学習に位置づけて実施した「めざせ！アウトドアの達人！！」である。単元計画は重度から軽度の知的障害のある中学部 2 年生 22 名を対象に、2 週間（計 9 回）の学習を実施した。実施内容は、単元計画担当教員 2 名、学部主事および野外教育を専門とする研究者（筆者）で、単元の目標とともに新型コロナウィルス感染症拡大防止の観点から検討した。また、知的障害のある生徒の特性を踏まえた学習活動となるように、各活動を 2 回または 3 回連続して設定し繰り返し学習できるようにした。また、個人の興味関心によって活動が選択できるように、お好み活動（個人の選択活動）を設定した。指導は担任教師、学部主事、学校支援員、介助員の指導を基本とし、部分的に研究者（筆者）も指導に加わった。なお、刃物や火の取り扱いなど危険を伴う活動については、研究者（筆者）による事前講習を行い、

安全に指導できるよう準備した。
　効果検証には、担任教員および保護者のテキストデータによる行動記録および担任教員による半構造化インタビューを行った。分析は、分析焦点者を「自然体験活動を取り入れた生活単元学習を指導した知的障害特別支援学校の教師」とし、分析テーマを「知的障害のある生徒における自然体験活動を取り入れた生活単元学習を通した学びのプロセス」と設定し、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチにより質的分析を行った。

４．研究成果

（１）知的障害特別支援学校における自然体験活動の実態

　調査の結果、中学部で 66.5%、高等部で 55.2%が教育課程に位置付けられた自然体験活動を実施していた。障害種別からみた自然体験活動の実施率は、中学部では知的障害、視覚障害、聴覚障害が高く、肢体不自由と病弱者が低かった。また、高等部では知的障害が高く、視覚障害、聴覚障害、肢体不自由、病弱者が低かった。自然体験活動の教育課程上の位置づけは、中学部・高等部ともに、生活単元学習、特別活動、総合的な学習の時間が多かった。活動内容は、中学部・高等部ともに自然観察、レクリエーション、野外炊事（かまど）、登山・ハイキングが多かった。自然体験活動を実施していない理由の多くは、「生徒の実態に合わない」であった。また、高等部では「他の教育活動を行っている」、「時間確保が難しい」という理由も多かった。
　障害者は自然体験活動を実施する機会が少ないことが指摘されているが、本調査の結果から、学校の状況や生徒に実態に応じて様々な形で教育課程に位置付けて実施していることが明らかになった。一方で、障害種別によって肢体不自由や病弱者では実施率が低いことも明らかになった。生徒の実態によっては、学外に出て自然体験活動を実施することが難しい学校も存在するため、学校内や身近な環境で自然体験活動を実施する工夫も必要となると考えられた。

（２）知的障害特別支援学校の校内で実施する自然体験プログラムの開発および有用性の検証

　本研究の結果、特別支援学校内で実施する自然体験プログラムが安全かつ効果的に実施できることを明らかにした。また、自然体験活動の学びのプロセスについて、以下のストーリーラインが明らかになった。
　知的障害のある生徒は、【体験の少なさ】が根底に存在し、活動の直接体験により［変化する状態への興味関心］と［危険に対する恐怖心］という、相反する【活動に対する興味関心と恐怖心】を持ち、木が燃えたりマシュマロが焼ける様子を見て［反応や変化の実感］を持ち、焚き火で火を絶やさないように薪をくべるなどの［意味のある行動への気付き］があり、［活動の見通しが持てる］ようになった。活動に恐怖心を持っていた生徒は［恐怖心の克服］ができた。このように、知的障害のある生徒は、自然体験活動を取り入れた生活単元学習を通して【実感を伴う理解】という学びを得ることができた。その結果、［活動を楽しむ］や［心の落ち着き］といった【感情の変化】とともに、［活動意欲の高まり］や［主体的・積極的な行動］という【意欲と行動の変化】が起きた。一方、教師の視点から【自然体験活動を取り入れた生活単元学習の特性】として、各種の自然体験活動はその特性や工夫の仕方で生徒それぞれの［認知レベルに応じた体験の可能性］があり、一方で単元の［目標設定の難しさ］も存在することがわかり、これらは、【活動に対する興味関心と恐怖心】、【実感を伴う理解】、【感情の変化】、【意欲と行動の変化】に関連していた。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計2件（うち査読付論文　2件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 中丸信吾，渡　正，尾高邦生，渡邉貴裕	４．巻 25
２．論文標題 教師からみた知的障害のある生徒における自然体験活動を取り入れた生活単元学習の学びのプロセス	５．発行年 2022年
３．雑誌名 野外教育研究	６．最初と最後の頁 99-110
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.11317/joej.2022_0007	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 中丸信吾，渡邉貴裕，渡　正，尾高邦生	４．巻 26
２．論文標題 特別支援学校における自然体験活動の実態調査－2019年度の実施状況－	５．発行年 2023年
３．雑誌名 キャンプ研究	６．最初と最後の頁 25-33
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計5件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 中丸信吾，渡　正，尾高邦生，渡邉貴裕
２．発表標題 知的障害者における自然体験活動の実践的研究～特別支援学校内で実施する活動に着目して～
３．学会等名 日本野外教育学会第23回大会
４．発表年 2020年

１．発表者名 野口和行，竹内靖子，中丸信吾，針ヶ谷雅子，古谷洋祐，吉松梓
２．発表標題 特別な支援や配慮を必要とする人たちを対象とした自然体験活動の実践－新しい生活様式を踏まえて－
３．学会等名 2020年度日本野外教育学会オンライン研究大会
４．発表年 2020年

１．発表者名 中丸信吾、渡　正、尾高邦生、渡邉貴裕
２．発表標題 大学と特別支援学校の連携による知的障害者の自然体験活動に関する実践的研究
３．学会等名 日本野外教育学会第22回学会大会
４．発表年 2019年

１．発表者名 中丸信吾、渡　正、尾高邦生、渡邉貴裕
２．発表標題 大学と特別支援学校の連携による知的障害者の自然体験プログラムの検討
３．学会等名 日本体育学会第70回大会
４．発表年 2019年

１．発表者名 中丸信吾
２．発表標題 野外活動を届ける　大学と特別支援学校の連携による野外活動の推進
３．学会等名 第3回スペシャル・ニーズ・キャンプ・フォーラム in なすかし
４．発表年 2019年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	渡邉　貴裕 (Watanabe Takahiro) (00621731)	順天堂大学・スポーツ健康科学部・先任准教授 (32620)	

６．研究組織（つづき）

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	渡　正 (Watari Tadashi) (30508289)	順天堂大学・スポーツ健康科学部・准教授 (32620)	
研究分担者	尾高　邦生 (Odaka Kunio) (60851102)	順天堂大学・スポーツ健康科学部・准教授 (32620)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関